

ニューカレドニア短期留学 2019

土曜教室 木下 究

去る 8 月 3 日から 12 日まで、立川市の中学生 10 名のフランス領ニューカレドニアへの短期留学に同行してきました。大変貴重な経験でしたので、これまでの交流の歴史も振り返りながら、簡単な報告をさせていただきます。

—独立に揺れるニューカレドニア—

日本から約 8 時間のフライトのニューカレドニアは、四国とほぼ同じ面積に約 28 万人（うち首都ヌメアに 10 万人）が暮らす海洋国家です。フランスの他の海外領土と異なり、「特別自治体」という地位を得て、大幅な自治権を獲得しています。1980 年代の「独立」をめぐる武力衝突、流血の惨事後の和平交渉で段階的に権限移譲が果たされた結果です。

昨年 11 月に独立を問う住民投票が実施されました。独立反対派が 56% を獲得し、独立は否定されましたが、投票後のニュース映像を見ると、独立反対派は意気消沈し、独立派は勝利したかのような喜びようでした。独立派自身も 44% もの賛成票を得られるとは予想だにしていなかったからです。

住民投票を定めた協定で、2020 年、2022 年にも再び住民投票を実施する権利が与えられています。実際に投票が実施されるかどうか予断を許しませんが、先住民系カナック、ヨーロッパ系、アジア系の人々が共生するニューカレドニアにとっては、「多文化共生」がなによりも大事な課題であり、その帰趨が将来を決するといっても過言ではありません。

—中学生たちの交流—

このようなニューカレドニアと立川市の中学生たちの交流は、四半世紀前にさかのぼります。

1993 年に開催された立川子供世界音楽祭にニューカレドニアの子どもたちがフランス代表として参加したことをきっかけに、翌 1994 年、20 名の中学生が来日し、柏小学校に短期留学して、同校校区にホ



校長室にて

ームステイしました。このとき、立川第四中学校にも 1 日留学しましたが、同年齢同士が親しく交流する様子から、中学校への短期留学がめざされました。その結果、ボドゥー中学校と第四中学校との交流留学が実施され、2013 年からは、第四中学校のみならず市内の全中学校から短期留学生を募集するようになりました。この 25 年間にニューカレドニアから 150 名、立川から 100 名の中学生が短期留学に参加しています。

—自分の頭で考える子どもたち—

さて、ニューカレドニアの学校生活は日本とかなり違います。フランスの教育制度では、小学校 5 年、



教室にて

中学校 4 年、高等学校 3 年という区分ですが、同じクラスで同じ授業を受けるのではなく、各生徒が個人別のカリキュラムに従い、授業ごとに教室を変えていきます。日本の大学での受講風景が中学校で繰り広げられている、と言ってもいいかもしれません。

また、公立中学校ではありますが、習熟度別のカリキュラムも用意され、オーストラリアでの単位としても認められる「英語による歴史・地理」の授業などもありました。もちろん、私語が多く、先生の話に集中しない授業も見受けられ、すべてが素晴らしいとは言い切れません。しかし、教育の基本を「正解を暗記する」ことよりも「自分の頭で考える」ことに置いているのは確かなように思われました。



市役所にて

州政府や市役所も訪問し、ニューカレドニアの歴史や自治の仕組み、環境保護などについてお話をうかがいましたが、同行してくれた現地の中学生たちがごく自然に次々と質問をし、大人たちと成熟した会話を交わしているのを見ると、自分の意見をまとめ表明していく能力の高さに驚きを感じました。

立川市から参加した中学生たちは、語学力の課題もあり、かならずしも十分なコミュニケーションがとれたわけではありませんでした。さまざまな手段で意思疎通をはかり、中身のある交流ができたと思

います。事前研修では硬い表情で、声も小さかった中学生が、現地でみるみる明るくなり、ハキハキと対応しているのを見ると、異文化交流の力というのを改めて実感しました。

州政府や市役所では、立川市が 2016 年に「多文化共生都市宣言」を行っていることを伝え、この交流事業がまさにこの宣言を体現するものだとアピールしてきました。

来年秋には、ニューカレドニアから 20 名を超える中学生が短期留学を予定しています。ホストファミリーを引き受けていただいたり、歓迎事業や交流事業へ参加していただければ、これにまさる幸せはありません。



みんなで東京音